

佐藤春夫 「美しき町」 論序説

海老原 由 香

A Preliminary Essay on Sato Haruo's "Utsukusiki Machi (The Beautiful Town)"

Yuka EBIHARA

一

佐藤春夫の「美しき町——画家E氏が私に語った話——」は大正八年八、九、十二月の「改造」に連載された。大正八年は佐藤春夫が新進作家として認知された時期である。「文壇新人録」(大正八年一月「文章俱樂部」で紹介され、「漫画新進六家」(在田稠画、大正八年五月「文章俱樂部」で描かれ、「文壇新人論5——佐藤春夫論——」(柳澤健、大正八年五月「新潮」で評され、第二作品集『お絹とその兄弟』(大正八年二月、新潮社)は「新進作家叢書16」として刊行された。「処女作を出すまで」(大正八年一月「新潮」)、「文壇へ出るまで」(大正八年二月「文章俱樂部」)、「新進四家の創作談」(大正八年四月「文章俱樂部」)、「佐藤春夫氏縦横談——新進作家訪問記(5)——」(大正八年九月「文章俱樂部」)などの題名にもそれは顕著にあらわれている。さら

に、六月には改作『田園の憂鬱』(新潮社)が刊行され、三年に及ぶ改稿にピリオドが打たれ「田園の憂鬱」が完成した。佐藤春夫の文壇的地位は不動のものとなり、次作への期待が高まった。その期待に応えるべく発表されたのが「美しき町」だったのである。

「美しき町」は、副題と同じ「画家E氏が私に語った話」という見出しを付けた部分を中心に、その前後が実線で区切られて、それぞれプロローグとエピローグを成している。

プロローグでは、「画家E氏が私に語った話」とあるところの大枠の語り手「私」が、画家のE氏から話を聞くに至った次第を語る。この「私」は「指紋の作者」であり、どうして魚の口から金が出たか?と、いふ神聖な喩の作者であるという設定になっているが、佐藤春夫は「美しき町」連載の前年にあたる大正七年七月に「指紋」(「中央公論」)を、大正八年四月に「どうして魚の口から金が出たか」という神聖な喩

「新潮」を發表している。また、エピローグには「私はもうこれ以上書くのはよさう」作者はさういふ種類の愚作を又一つ書いてしまつた——が、若しまた何かのかげんであとをつづけて見たいやうな気持ちにでもなつたら、無用なことだが、続「美しい町」を書かないとも限るまい。私はこの拙い未定稿一篇を私の友情のしるしにE氏と同夫人とに捧げたいなどとなり、この小説の書き手でもあることが明示されている。したがって、大枠の語り手「私」は佐藤春夫と等身大の人物として設定されているのである。

「画家E氏が私に語つた話」という作品の中心部分の語り手「私」は、今度は画家のE氏になる。「美しい町」は、三人の語り手「私」が登場するという語りの三層構造を成しているのである。⁽¹⁾E氏はここで語り手であると同時に主要な登場人物である。プロローグの語り手であつた第一の「私」は聞き手であり、E氏の話の中には登場しない。但し、次に示す二箇所だけは、(一)内に登場する。

それはファウスト第二部の一節であつた。——(E氏はさう言つてそれに歌はれてゐた意味だけを筆者に告げたが、それは多分次の部分ではなからうか。筆者は勝手にさうきめて、鷗外博士の訳から次に抄出して置く。)

それは……(E氏はさう言ひながら、立つて直ぐうしろの棚に積まれてあつたスケッチブックの一冊をとり出すと、彼自身とO君と私との三人が囲んでゐたそのお茶のテーブルの上でその白い一頁を披げると、「勿論精確と言へませんが……これを先づ隅田川とすれば……」と断りながら、画家らしい手早さでもつて次のやう

な図——ここに掲げるのは私がその時彼から貰つたその模写であるが——を描いてそれで私に説明した。)

(一)内の語り手は第一の「私」である。これらはE氏の話の中に「私」の語りを(一)によつてはめ込んだに過ぎない。

「画家E氏が私に語つた話」は、星印で区切られた五つの部分から成り立つ。仮に(一)——(五)の番号を付してその内容を示す。

(一)「今から八、九年ほど以前」(明治44年)の十月の或る日に、「私」(画家E氏)は築地のSホテルで幼なじみのテオドル・ブレンタノこと川崎慎蔵に再会し、「美しい町」の計画を打ち明けられ、計画に参加することになる。

(二)「私」(E氏)は川崎の依頼によりその後二箇月近く「美しい町」のための土地を探し、中洲に決まる。設計技師が公募され、T老人が仲間に加わる。

(三)「明治の最後の年の二月初め」から、Sホテルの一室を事務所として三人(川崎、E氏、T老人)による「美しい町」計画の第一期が始まる。T老人が設計図を書き、川崎が選定し、E氏が外観を決めて絵に描く。すぐに暇になつた川崎は、紙による町の模型作りに熱中する。

(四)「三年目の夏も終りになつて」(大正3年)「第一期の設備がもう多分今晚で終るといふ晩」に、「私」(E氏)とT老人は、川崎から「美しい町」の建築資金など最初から無く、今まで騙していたと告白される。その翌日川崎はドイツに行くと言ひ残して消えてしまふ。

(五) 放心状態の「私」(E氏)とT老人に、世代を越えた友情が芽生える。

エピソードでは、プロローグの語り手であった第一の「私」が再び語り手として登場し、E氏の話の後日談を伝える。

次に、「美しき町」の先行研究に眼を転じてみよう。まず、吉田精一氏は『佐藤春夫全集』第六卷(昭和42年9月、講談社)の「解説」で、「美しき町」は「東京の中洲に六千坪の土地を求めて理想的な街を設計しようとする」小説だと説明している。ここで「美しい町」に「理想的な」という言葉が冠せられたことから、以後「美しき町」は三人の男たちが理想的な町を作ろうとするユートピア建設譚として読まれるようになる。例えば井上健氏は、「佐藤春夫とエドガ・ポオ」(昭和52年9月「大谷女子大学紀要」)で「東京の中洲に六千坪の土地を求めて、百軒余の家からなる理想的な街を設計しようとする『美しき町』(大正八年、八、九、十二月)は、ウィリアム・モリスの「ユートピアだより」(News from Nowhere)を思わせるユートピア建設譚である」と述べている。芳賀徹氏は「春夫邸の客間の一隅で」(『新潮日本文学アルバム59 佐藤春夫』平成9年9月、新潮社)で、「美しき町」は「東京の中洲に春夫好みの小ユートピアを造ることを夢みる物語である」としている。川本三郎氏は『大正幻影』(平成2年10月、新潮社)で、「美しき町」を「隅田川の中洲(現在の日本橋中洲)に幻想都市(ユートピア)を作ろうとする夢にとりつかれた男たちを描いた」作品だとし、「温室のなかの夢」(ちくま日本文学全集「佐藤春夫」平成3年8月、筑摩書房)でも、「美しき町」では隅田川の中洲に心地

よい家が建ち並ぶユートピアのような町を夢見るのである。と説明している。高橋世織氏も、「佐藤春夫『美しい町』について——『倒景』としての東京」(昭和59年10月「媒」)の中で「五千坪ほどの」中洲の地に「百の家から成り立つ小さな町」、理想的なユートピア社会を作る構想を每晚「築地」のホテルの一室を借り切って三年間も練り続ける。と、「ユートピア」という言葉を用いて説明を加えている。

しかし、吉田精一氏の解説以前には、「美しき町」をユートピア建設譚とする解釈はもろろんのこと、梗概を説明する過程で「理想の町」や「ユートピア」といった言葉が用いられることもなかったのである。吉田氏が論証なしに述べた「理想的な街を設計しようとする」小説という解釈がそのまま受け入れられ、ユートピア建設譚として読まれているのが現状である。

先行研究において、「美しき町」がユートピア建設譚と解釈されてきたことは先述の通りであるが、それは特に「モリス的ユートピア」と捉えられてきた。川端香男里氏は、「モリス的理想を描いた佐藤春夫の『美しい町』」は、大正期の社会主義、アナキズム、トルストイ主義の影響下に生まれたユートピア的作品の一つだと位置付けている。⁽²⁾ 井上健氏は、「美しき町」(大正八年、八、九、十二月)は、ウィリアム・モリスの「ユートピアだより」(News from Nowhere)を思わせる、「美しき町」に描かれるのは愛と勤労の、悠々自適の、モリス的ユートピアである」と指摘する。⁽³⁾ 島田謹二氏は、「美しき町」の機構や住民の人物や生活は、やっぱりウィリアム・モリスから学んだのだろう。大杉栄との交わりが一時あったことは、少年の時代以来、作者がど

ここに持っていた、ある種の社会主義思想の文芸化に役立っていたらしく思われる」と推測している。⁴

「美しき町」の中には「理想の町」へユートピアという語は用いられていないが、一箇所だけモリスの名が出てくるところがある。それは、「美しい町」計画の第一期の段階での川崎の様子をE氏が伝える次の場面である。

それに又時々には彼（川崎 海老原註）は本を読んで居た。それはウヰリアム・モリスの「何処にもない処からの便り」といふ本で、それを彼は余程好きであつたと見える、何時でも読んで居たから。ウヰリアム・モリスは十九世紀イギリスの詩人、工芸家、社会主義

革命家である。「何処にもない処からの便り」とは、その代表作「ユートピアだより（News from Nowhere）」のことで、イギリスの社会主義者である「私」が夢の中で訪れた二百年後の未来社会の見聞録という形を取る。激しい革命闘争を経て資本主義、機械文明、あらゆる制度、政府、法律等が滅んだ後の未来は、共産主義により全ての人が幸せに暮らす理想社会なのである。このような本を愛読する人物が構想する町だというだけで「モリス的ユートピア」だろうと即断するのは早計である。「美しい町」と「モリス的ユートピア」の両者を比較することが必要になってこよう。

二

まず、社会革命後の未来における共産社会という「ユートピアだよ

り」の根幹に関わる設定が、「美しき町」には全く取り入れられていないのである。

「美しき町」における語りの現在は、明治四十四年を「今から八九年ほど以前」としてのことから、大正七、八年頃とわかる。大正八年に発表された「美しき町」は、同時代を時代設定とする現代小説なのである。「美しい町」の計画は「明治の最後の年」からの「十年計画」であるから、二三年後の大正十年には完成する予定だったのである。二百年後の未来に設定したからこそ可能であつたモリスのユートピアと、同時代に建設しようとした「美しい町」との間には大きな隔たりがある。

さらに、「美しい町」の建設予定地に選ばれたのは、中洲の「上から最もよく見下すことの出来る部分」である。それは、川崎の出した次の条件を満たしていたからである。

その美しい町といふのはどこか東京の市中になくはいけなないのだ。それは市のなかにくつきりとして一郭をつくつて居て、思ひがけないところに在つて、併し多くの人々がそれをつくづくと見る機会を持った場所でなくてはならない。

「美しい町」は、周囲に大勢の人が住む社会があつてはじめて成立する一区域なのだ。川崎がそこに建設しようとしている「さまぐ」な各異つた形の併し互に最も調和し合つた家々、それは多分百軒よりは少くない家々が、言はゞ一つの城郭のやうな形をする町は、住宅街のようであり、はたして理想社会と呼べるのか疑問である。「ユートピアだより」が夢想したのはイギリスという国家が革命を経た二百年後

の未来像であるが、「美しき町」の方は百軒未満の家々が集合した数年後の町に過ぎない。さらに、「美しき町」には「ユートピアだより」のような中央集権への批判や社会主義的側面も見出せないのである。

「ユートピアだより」においては、機械文明の否定も重要な要素である。そこでは不用品を大量生産していたずらに貧富の差を産み出す機械は必要だと考えられている。人々は手仕事で必要なものを必要なだけ作り、創造の喜びという報酬を得るのである。ところが、「美しき町」の川崎はへどんな形ででも時代が後がへりするといふことを喜ばない。そして科学や機械については次のような考察を巡らす。

その時（科学が完全に発達した時 海老原註）初めてもろもろの機械は怖るべきものでも憎むべきものでもなくなつて、真に我々の日常生活のなかで欠くことの出来ない愛すべきものになる。我々人間の生活が極致に達して合理的なものになるためには、我々の生活の半面である科学もそれ自身の方法でその極致の発達を遂げねばならない。私の考へでは、今日あるすべての有用な機械が、最も充分に發育を遂げた時には、あらゆる機械力は、そのどんなものでも、刻々に人の健康を腐蝕させなければ措かないやうな大工場だけでなければ動かないといふ風なものではなくつて、例えばそれはよく愛育されて手馴らされた優しい野獸、牛や馬が、唯その美しい能力だけを残して居て人を助けるやうに、さうして人々が愛情をもつてそれに近づくことが出来るやうに、あらゆる必要な機械は取り扱ひ易いものになり個人々々の楽しい好きな手芸を最も機敏に手助けをする最上の道具になる。その時こそ又す

べての機械工業が芸術に高められるために必須な一階梯でもある。

科学信奉者である川崎は、機械文明の未来について「ユートピアだより」とは異なる極めて樂觀的な期待を抱いているのである。

「ユートピアだより」の未来社会は共產社会であり、当然のことながら私有財産は廃止されている。さらに貨幣も廃止されている。へ一た金のことなどに目をくれない、そんなものを少しも尊重しない「美しき町」の川崎は、いつも好んで次のような理屈を語る人物であつた。

今、我々が生活してゐる社会生活は、金銭の無限な勢力といふ可笑しく奇怪な言説——グロテスケンを基礎にしてそれに附随するところのグロテスケンの様々な種類で迫持ちになつた危かしく醜惡な建築物で、しかも二足無羽動物はその奇異な巢の中で平然と住んでゐる。

このような金銭批判は「ユートピアだより」と共通する。ところが、川崎が企てた町はこともあろうに莫大な遺産を大前提とする。そしてへそんな町などをこしらへる金などはなかつたからといって、莫大な金銭を使わない建設方法を模索することもなく、町造りの実現はあつさり放棄される。へ金を持つてゐるといふことは現代ではEverythingだ。現代では金のあるといふことは偉大な天分の一つなのだ。いや、唯一のそれだと言つて見てもよいと皮肉でなしに肯定し、へ「美しい町」は決して出来ないのだ。私には金がないのだ！、それに要する大切な天分——金がないのだと嘆いてみせる川崎は、決して金銭

を否定していない。川崎は、町造りの根幹に関わる金銭に関しては常にアンビバレンツな感情を抱いているのである。また、建物に対するへ一切の無用を去つても善美を尽す」というへ美しい町への美意識は、美しい装飾を施した「ユートピアだより」の家々とは異なる。

それでは、島田謹二氏が示唆するようにへ美しい町への住人の条件には「ユートピアだより」の影響のあとが見られるのであろうか。川崎はへ美しい町への住人の条件を六項目列挙している。それを次に引用する。

(1)私の拵へた家に最も満足してくれる人。(2)互に自分達で拵へ合つて夫婦になつた人々、さうして彼等は相方とも最初の結婚をつづけて子供のある人たちでありたい。(3)彼自身の最も好きな職業を自分の職業として拵へた人。さうしてその故にその職業に最も熟達して居てそれで身を立ててゐる人。(4)商人でなく、役人でなく、軍人でないこと。(5)その町のなかでは決して金銭の取引きをしなないといふ約束を守つて、そのためには多少の不便を予め忍んでくれる人。そのために私はその私が考へる町の外に、別にその町の人たちのために金銭の受け渡しをする場所をも設ける筈である。(6)その人たちは必ず一正の犬を愛育すること、若し生来犬を愛しない人は猫を養ふこと、犬をも猫をも嫌ひな人は小鳥を飼ふこと。

(2)のへ互に自分達で拵へ合つて夫婦になつたへの部分には、「ユートピアだより」の家族が法律的、社会的強制でなく互いの愛情によつて結合していること、(3)には「ユートピアだより」の人々が自分の趣味

に合つた仕事をする事、(4)には「ユートピアだより」の未来社会が制度、政府、軍隊、警察を必要としないこと、(5)には「ユートピアだより」の貨幣のいらぬ社会との類似点が見出せる。しかし、(5)のへ町の外に、別にその町の人たちのために金銭の受け渡しをする場所をも設ける」という点は、完全な金銭の否定ではない。しかも、金銭に関して川崎がアンビバレンツな感情を抱いていることは先述の通りであるから、(5)をも類似点に数えられるかどうかは疑問である。そうすると、川崎が列挙したへ美しい町への住人の条件の半分程度にしか「ユートピアだより」との類似点は見出せないことになる。

ここで注意すべきことは、これらの条件が川崎の深慮に基づいて積極的に提示されたものでないということである。画家E氏が川崎から最初に計画を打ち明けられた時、へその家に住んで貰い度い人といふのはどんな人か」と質問した。それに対して川崎がへ困つたやうに口籠りながらへどうもそれには未だ私の考へ方が充分ではない」と前置きをした上で挙げたのが、先に示した条件だったのである。さらに、へそんな気紛れな条件で住んで見るといふやうな人が不幸にも一人も見つからなかつた場合には、私はただ私の建てた家々を人に頼んで綺麗に掃除をして置いて貰はうと思ふ。それから夜になつたら、誰も住む人の居ないその家々のなかへ私はかがやかな灯をともして置かうと思ふ。それらの窓からその灯が美しく見えるやうに」と続ける。その後の計画の過程でへ美しい町への外観は着々と構想され、川崎は紙による精密な町の模型を拵へる。そこには、へ夜になつたら、誰も住む人の居ないその家々のなかへ私はかがやかな灯をともして置かうと思ふ。それ

らの窓からその灯が美しく見えるように」と語った通りの工夫が凝らされる。

その卓上の紙の「美しい町」には、その家のなかにはそれぞれに一つ一つのかすかな光があつて、それがそれ等の最も微細な窓から洩れ出して、我々の目の下には世にも小さな夜の街が現出して居た。その窓といふ窓からこぼれ出す灯影は擦りガラスの鏡の静かな水の面へおぼろにうつつた——そこにも、彼の細かな用意があつて、その鏡が家々に対して或る適当な角度をなして敷かれてでも居たのであらうか、たくさんの灯影はちようど水の面をかすめた時のやうに、細く、長く、そこには映し出されて居た。

「美しい町」の外観が美しく構想されていくのに反して、計画の過程で住人の条件が煮詰められることはない。川崎の構想の中では住人の条件はさほど重要ではなく、町の美しさを引き立たせる要素の一つに過ぎないのである。唯一「ユートピアだより」との類似性が多少見出せた住人の条件が重要な要素でないとすると、モリスの「ユートピアだより」と「美しき町」との関連はなおさら薄いということになる。

それではなぜ、川崎の愛読書がわざわざヘウキリアムモリスの「何処にもない処からの便り」といふ本だとされているのであろうか。

ここで題名が「何処にもない処からの便り」とされていることに注目したい。現在「ユートピアだより」という邦題で知られているモリスのNews from Nowhereは、明治三十七年に堺利彦によって「理想郷」（1月3日～4月17日「平民新聞」）の邦題で初めて抄訳された。次いで、ユートピア物語二十三篇の目録を示し、そのうち八篇を紹介

した井筒節三の「ユートピア物語」（大正8年7～9月「中央公論」）が連載され、モリスの「ユートピア物語」も取り上げられた。その時の邦題は、「目録」（7月）では「無可有郷だより」、梗概（二部抄訳）と解説（9月）では「無可有郷見聞記」となっている。同じ号に佐藤春夫の小説「海辺の望楼にて」が掲載されており、佐藤春夫も当然目にしたはずである。佐藤春夫は「吾が回想する大杉栄」（大正12年11月「中央公論」）の中で、「ユートピアだより」に言及しているが、そこでは「烏有郷消息」という題名を用いている。昭和になつて相次いで翻訳が出るが、その題は「無可有郷だより」（布施延雄訳『社会思想全集』昭和4年1月、平凡社）、「無可有郷通信記」（村山雄三訳『世界大思想全集』昭和4年8月、春秋社）である。「ユートピアだより」が定着するまでに様々な邦題が試みられるが、「美しき町」のように「何処にもない処からの便り」と直訳されたものはない。大正時代には「無可有郷」という語句を用いた題が定着していたようである。「美しき町」のヘウキリアムモリスの「何処にもない処からの便り」といふ本」という表現は、アメリカ帰りの川崎が英書を読んでおり、モリスに関して無知なE氏が直訳で題名を語ったことを意味するのである。

「美しき町」で川崎の愛読書がヘウキリアムモリスの「何処にもない処からの便り」とわざわざ示されているのは、彼の思想を示すためではない。「美しき町」では、川崎の告白を聞くまでもなく、冒頭から随所に「美しい町」が実現しないことが暗示されている。その一つに、E氏が川崎から初めて計画を打ち明けられた帰途、へ私はどこだか知らないところを通つて、そのどこにも無い「美しい町」の方へ急いで

るやうな気がした」という場面がある。この時点でのE氏は「美しい町」が実現しないとは夢にも思っておらず、全てがわかつている語りの時点から回想した時に「どこにも無い「美しい町」の方へ急いでゐる」と感じるのである。それは「美しい町」が「どこにも無い」すなわち実現されないことの暗示となつてゐる。川崎の愛読書が「ウヰリアム・モリスの「何処にもない処からの便り」」と示されているのも同様である。つまり、モリスに関して無知なE氏が計画の段階での川崎の様子を「何処にもない処からの便り」といふ本を「何時でも読んで居た」と語るのは、「美しい町」が「何処にもない」すなわち実現されないことを暗示しているのである。川崎の愛読書がモリスの本であることを過大に解釈して、「美しき町」をモリス的ユートピア建設譚と捉えてしまうと、作品の読みを誤ることになりかねない。

佐藤春夫は「吾が回想する大杉栄」で、大正四年頃、荒川義英とともに大杉栄の家を訪問して、「社会主義者や無政府主義者の小説家のこと」が話題になつた時に、大杉栄にモリスのことを尋ねたことを回想している。

彼はその烏有郷消息を大変好きだと言つた。「美しい」と彼は言つた——美しいといふ言葉を確認に使つたのを覚えてゐる。「僕はあの本を昔から何遍も読んだ。書いてあることはつまらないさ——だが、美しい。英語でも読んだし、仏蘭西訳でも読んだ。独逸語を覚えた時にも読んだ。——新しい語学をやり出すときつとあの本を見たものだ。あれをよむといい気持がするので……」

引用文中の「彼」と、「」内の「僕」はともに大杉栄である。この

回想から、遅くとも大正四年頃には佐藤春夫は社会主義文学者としてのモリスの存在を知っており、話題に出すほどの関心を示してゐたとがわかる。しかし、当時は全訳あるいは逐語訳は無く、佐藤春夫が「ユートピアだより」の原典を読んでいたかどうかは定かでない。何よりも、ここでの会話の内容、あるいは佐藤春夫の記憶に残つた大杉の言葉は、モリスの社会主義思想でもなければユートピアでもなく、文章の美しさだったのである。そして前述の佐藤春夫の視野に入つてゐたであろう井筒節三の「ユートピア物語」にも「無何有郷見聞記」は、古来ユートピアの中でも、最も詩的な美しい文章です」と、特に文章の美しさが紹介されていたのである。

三

ところで、「美しき町」が連載される前年の大正七年に、武者小路実篤が「新しき村」の計画を発表すると、佐藤春夫は逸早く賛同の意を表している。

○……(略)……私は白樺の人人が集つて企てるといふ「新らしい村」に対しては、堺利彦氏などとは違つた期待を持つて居る。私のいふやうな種類のコンミニズムも、いままでいくらもあつて、いくらも無駄で終つたかもしれない。けれどもいいことは幾度企てられて、幾度失敗しても決して所謂無益といふものではない。寧ろ、幾度も幾度も懲りずに企てらるべきものである。さうしてこんな計画は、武者小路氏のやうな真剣な理想家であり空想家で

ある人々が集つて行はれるのに、最も望ましい計画である。

○白樺の人人のやうに、衣食の道が充分であれば、何でもしたいことが出来る。とそんな馬鹿な卑屈なことを言うものではない。

何でも出来るやうな境遇に居て、彼等のやうな道を撰んで居るところこそ彼等を尊敬すべき所以でもある。

○私は「新らしき村」の計画が、出来るだけ大きく、どこまでもどこまでも波及する⁽⁶⁾と思つて居る。

ここで堺利彦氏などとは違つた⁽⁷⁾と言つてゐるのは、堺利彦の「新らしき村」の批評（大正7年6月「中央公論」）を指す。社会主義の立場からすると、一種の刺激といふ意味で、此の「新らしき村」の計画も存外結構だと思つてゐる。以上の期待はなく、武者君に賛成が出来ないのだ⁽⁸⁾と言う。武者小路の「新しい生活に入る道」（大正7年5月「白樺」）の文言の一々まで取り上げた批判は、武者小路が単行本収録の際、「新しい生活に入る道」の一部を削除せざるを得なかつたほどである。その批判の一つに、これまでへ多くの空想的社会改良家⁽⁹⁾が「新社会の建設実現に熱中し、」へ皆失敗に歸した原因を分析し、へ武者君の理想と実現とのコントラストも恐らく此徹⁽¹⁰⁾を踏むより外はない」という指摘がある。佐藤春夫のへいいことは幾度企てられて、幾度失敗しても決して所謂無益といふものではない。寧ろ、幾度も幾度も懲りずに企てらるべきものである⁽¹¹⁾という発言は、これを受けてのもの⁽¹²⁾と見られる。ここで佐藤春夫が実現の可否ではなく、計画するという精神を評価していることは注目⁽¹³⁾に値する。また、へ真剣な理想家であり空想家である人々が集つて行はれるのに、最も望ましい計画⁽¹⁴⁾へ何でも出

来るやうな境遇に居て、彼等のやうな道を撰んで居ることこそ彼等を尊敬すべき所以である⁽¹⁵⁾などと述べてゐることは、「美しき町」に重なる。すなわち、莫大な財産を得てへ何でも出来るやうな境遇⁽¹⁶⁾にある（と思つた）川崎が構想したのがへ美しい町⁽¹⁷⁾であり、川崎、E氏、T老人というへ真剣な理想家であり空想家である⁽¹⁸⁾三人が計画を進める。結局町は出来ないが、へ失敗しても決して所謂無益といふものではないのである。「新しき村」に類似した「美しき町」という命名も意図的であると考えられる。「美しき町」は、「ユートピアだより」よりむしろ「新しき村」と関連があるのである。

勿論、佐藤春夫は「美しき町」でへ美しい町⁽¹⁹⁾が実現しないことを描いて「新しき村」へのアンチテーゼを示したわけではない。また、最初から「新しき村」は実現しないと見做した上で、その精神のみを評価したわけでもない。「新しき村」建設が現実のものとなつた後も、佐藤春夫の武者小路に対する評価は変わらないのである。「流行の作家、流行の書物」（大正11年1月「改造」）では、武者小路実篤のことをへ僕の尊敬することの出来る稀く少数な現代人物中の重要な一人である⁽²⁰⁾と述べ、「秋風一夕話」（大正13年10、12月「隨筆」）では、へ現代日本文壇にとつて武者小路実篤氏の出現は近世思想史上にルツソオがあることに比較すると僕は信じる⁽²¹⁾とし、武者小路が世に出た当時は皆が笑ひ者にしてゐたことをあげて、へはつきり言ふが、僕だけは武者氏を新精神の使徒だと感じまた言ひもしたことは、別に先見の明を誇るのではない。武者氏は当時既に幾多の仕事がありまた充分に新精神そのものであつたのだから、ただ当然の観察をしたことにしかなら

ないのだが、その当然なことが皆に出来ないで、しかも今日になつて
ずる／＼べつたりと何時の間にか感心してしまひ影響まで受けてゐる
などは、男子としてあまり気持ちのいいことではなさきうなのだが、
と漏らしている。「新しき村」についても、直接の参加こそないもの
の、「新しき村」後援のための『現代三十三人集』（大正11年1月、新
潮社）に参加し、「新しき村」の講演会に出講（昭和3年2月、6月）
し、「新しき村」創立十周年にあたっては、祝賀と後援のための六十九
人集の発起人となつて『十年』（昭和4年9月、改造社）を編むなど、
陰ながら支援を続けている。このようなその後も変わらない武者小路
実篤に対する評価と「新しき村」支援への気持ちだが、「美しき町」執筆
の背景にあるのである。

「美しき町」が「新しき村」に対してどのようなメッセージを有す
るか。そのためには、「美しき町」自体の分析と解釈が必須となる。そ
れは、続稿「佐藤春夫『美しき町』論」で論じる。

註

- (1) 第三の〈私〉は〈美しい町〉計画の発案者であり、計画の中心
人物テオドル・ブレンタノこと川崎慎蔵である。E氏の話の登
場人物なのだが、その発言内容が直接話法の形で頻繁に登場す
る。しかも、計画を打ち明ける場面の会話は、例えば『定本佐
藤春夫全集』（平成10年4月、臨川書店）では二頁近くにも及
び、計画が実現されない次第を打ち明ける場面は、同全集では
四頁にも及ぶ独白になっている。

- (2) 「ユートピアの幻想」（昭和46年6月、潮出版。平成5年10月、
講談社学術文庫）

- (3) 「佐藤春夫とエドガア・ポオ」（昭和52年9月「大谷女子大学紀
要」）

- (4) 「『美しき町』と『F・O・U』」（昭和54年7月「浪漫派」）

- (5) 大正七年五月に「新しい生活に入る道」（後に「新しき村に就て
の対話——第二の対話——」と改題）を、六月に「新しい生活
に入る道 二」（後に「新しき村に就ての対話——第三の対話
——」と改題）を、ともに「白樺」に発表。六月、第一回会合。
七月、機関誌「新しき村」創刊。

- (6) 「武者小路実篤氏に就て」（大正7年7月「中央公論」）

付記

「美しき町」の引用は『定本佐藤春夫全集』第3巻（平成10年4月、
臨川書店）による。